



栗東子育て教育Nextプロジェクト を始めるにあたって (2020年12月21日案)

栗東市では、第3次教育振興基本計画(教育大綱)に掲げる「0歳から15歳を経て成人に至るまでの一貫した子育て及び教育」の実現を目指して、この度、その推進資料として「栗東子育て教育ビジョン」(以下、「ビジョン」と表記)を作成しました。

今後このビジョンを家庭、地域、校園が共有し、「**心豊かにたくましく、自立し、共生できる子ども**」をめざします。その一連の取組を「栗東子育て教育Nextプロジェクト」として推進します。「ビジョン」は、最終的には地域、家庭、校園で共有いただくことを目指しており、まずは校園において各校区の保幼小中連携の取組を通して共有していけるようすすめていきます。

まずは、「ビジョン」の構成や「発達段階」「接続期」等の意味やイメージについて、ご説明させていただきます。

1. なぜ「栗東子育て教育ビジョン」が必要なのか

「栗東子育て教育ビジョン」をご覧になられて、その内容に「目新しさがない」と思われる方がおられるかもしれません。それは、それぞれの内容自体は、これまで保育指針や学習指導要領等で掲げられた指導項目を基にしており、その項目自体に本市独自の特徴を持たせているわけではないからです。

ではなぜ、「栗東子育て教育ビジョン」をつくったのか。

それは、**0歳から15歳までの育ちの一覧を一面の図表とし、発達の「連続性」と「非認知能力」の育成過程を視覚化**することを目的としているからです。ですから、この「ビジョン」は、これまで保育現場で使用されてきた「すくすく育つりっとう子(保育教育全体計画)」や各学校の各種指導計画と併用されることを想定して作成しています。

2. 発達の「連続性」とは

これまで**0歳~5歳の「乳幼児期」と、6歳から15歳の「学齢期」と**に分け、国・都道府県・市町において担当課を分けてきました。しかし、現実の“子育て”や“育ち”にはそのような区切りなどなく、常に連続したものです。

そこで今回の「栗東子育て教育Nextプロジェクト」では、発達を校園や担当課によって区切ることなく、**発達の「連続性」を重視し、目の前の子どもたちは、この先どのように成長していくのか、どのように成長してきたのか**を、関わる大人が理解することを推進します。



3. 「非認知能力」の重要性

最近では「学びを支える力」とも言われる「非認知能力」は、目標や意欲、興味関心を持って、粘り強く取り組む力や、仲間と協調する力、自制心などを主な内容とします。テストなどで測ることができる「認知能力」と違って見えにくく、その分定義を巡っても諸説があります。しかし、**社**

会的自立や自己実現に大きく影響すると考えられ、日本ではもちろんのこと、世界的にもその育成方法は関心を集めています。特に**幼児期から小学校低学年の時期が育成の力を握る**という研究成果は注目されています。またその育成には、継続的で安定した働きかけによる「習慣化」が重要と考えられます。

そこで今回の「ビジョン」では、0歳から15歳までの**行動の習慣化を重視**し、各段階での**一貫した働きかけ**を推奨します。

4. 「観点・領域」の設定

「ビジョン」の左側に配置した「観点・領域」では、先進地(草加市)の実践を参考に「非認知能力」の要素となる13の項目を、「せいかつ(生活習慣)」「あそび・まなび(遊び・学習習慣)」「つながり(社会的スキル)」の3つに分類し、整理を行いました。

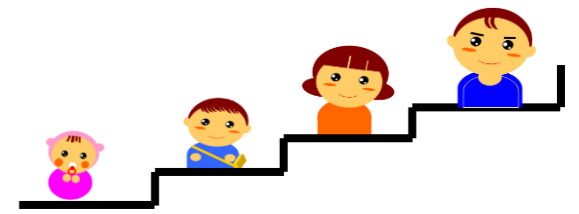
5. 「発達段階の特徴」「発達課題」

「ビジョン」の上部には、0歳から15歳までの年齢・学年と、かたまりの区切りとして「年齢スケール」を配置しています。ここでは、比較的年齢ごとの特徴がはっきりとした0歳から5歳までを1歳刻みにし、同年齢でも個人差が見られ始める小学校低学年は2歳刻み、そして「抽象的思考」や、「客観的・論理的思考」の獲得で個人差が際立つ時期(9歳・10歳の壁)を迎えた小学5年から中学1年は3歳刻み…というように、**目盛りの間隔を時期によって変化**させています。

その下段の「発達段階の特徴」「発達課題」では、「子どもの成長と発達は、一人一人違いがあるものの、共通した特徴があり、それは日々の変化が見て取れる『なだらかな坂道』ではなく、変化しない時期と急激に変化する時期を持つ『階段』のような『発達段階』を持つ」とする「**発達段階**」を基調としています。こうした考えには諸説ありますが、今回は、最も一般的な発達段階モデルを採用しています。

また「思春期」など、時には周囲の大人を困らせる特性を「成長のために乗り越えるべき課題」として、「発達課題」と表現しています。

また表中の○印の各項目(つきたい力)は、**個人の特性や家庭事情等に応じて、可能な範囲で達成を目指していただく**ものです。しかし、保育者や保護者の細やかな配慮のもと信頼関係を拠り所として成長していく時期(特に0歳から2歳)においては、★印で「大人の関り」を掲載しています。



6. 「接続期」と「接続ゾーン」

年齢スケールの3カ所には、「接続期」と「接続ゾーン」という「帯」をつけています。もともと「接続期」という考えは、2000年前後に大きな社会問題となった「学級崩壊」の発生メカニズムの解明の中で、小学校低学年、特に小学校1年の問題・課題(小1プロブレム)が浮き彫りにされ、その原因である保育園・幼稚園と小学校の**しくみのギャップ**の解消を目的に生まれました。

一方そうした**しくみのギャップ**は、小学校から中学校へ、また中学校から高校等への進学・就職の時期にもみられる課題であり、当然そうした時期にも同様の配慮や支援が必要とされます。そこで、「ビジョン」では、「接続期」を保幼~小学校のわたりの時期を表す固有の表現にとらえ、それに準じた小学校~中学校、中学校~高校等への進学・就職のわたりの時期を「接続ゾーン」と表現しています。

